慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 初代日銀総裁・吉原重俊の思想形成と政策展開 |
| Sub Title | Thought formation and policy development of Shigetoshi Yoshihara, first governor of the Bank of Japan |
| Author | 小川原, 正道(Ogawara, Masamichi) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.87, No.9 (2014. 9) ,p.1- 26 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20140928-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 初代日銀総裁・吉原重俊の思想形成と政策展開

小川原正道

一、はしがき
二、留学の経緯
三、イエール大学時代
四、外交官・大蔵官僚として
五、日銀総裁として
六、むすび

## 一、はしがき

イエール大学図書館マニュスクリプツ・アンド・アーカイブス（Manuscripts and Archives, Yale University Library）には、戦前期に日本人としてイエール大学に入学した学生の氏名・出身地・在学年・所属学科・取得学位などを一覧としてまとめた「エール大学日本学生名簿」が所蔵されており、冒頭には、「大原礼之助（ママ）」（一八

七〇―一八七一）、「津田真道」（一八七二―一八七三）、「山川健次郎」（一八七二―一八七五）の名がある。(1)

津田が幕末にオランダに留学し、維新後は司法省に出仕して法整備に尽力しながら、明六社に参加して啓蒙活動に努めたこと、また山川が物理学者・教育家として活躍し、東京帝国大学、九州帝国大学、京都帝国大学総長などを歴任したことは、よく知られている。では、イエールに最初に入学した日本人「大原礼之助」とは誰か。この点についてはすでに犬塚孝明が、これは薩摩藩から送られた第二次海外留学生・吉原重俊の変名であること、当初フランス留学を目指していたが途中で留学先を米国に変更し、留学生中でも英語力に優れていたこと、またボストン近郊で熱心に勉学に努めてイエールに留学し、「好成績で卒業」後に岩倉使節団に外務三等書記官に任命され、のち大蔵省に転じて、初代の日本銀行総裁に就任したこと、などをあきらかにしている。(2)

ただ、イエールの日本人留学生や吉原個人についての研究が乏しいため(3)、これまで、吉原が日本人として最初にイエールに入学した学生であったこと自体がほとんど知られておらず、在学中の様子はいかなるものであったのか、イエール時代の経験がその後のキャリアに活かされ、政策形成・政策展開に反映されたのか否か、といった考察は十分に行われていない。

そこで本稿では、イエール大学での調査を踏まえ、これまで研究上用いられることのなかった、「吉原重俊関係資料」（鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）などを活用して、吉原のイエール時代について検討を加えるとともに、その知識・思想形成過程と、それがその後の外交官や大蔵官僚、日銀総裁としての政策形成・政策展開にいかなる影響を与えたのかについて、若干の考察を加えたい。

## 二、留学の経緯

吉原重俊は、弘化二（一八四五）年四月十日鹿児島に吉原弥次郎として生まれ、藩校造士館に学んだあと、尊攘派の志士として活動した。幼少期から文学を好み、漢文、詩文の読書、作文に長けていたため、僅か十二歳で藩主の句読師助に任じられるほどであったという。文久二（一八六二）年四月の寺田屋騒動で鹿児島に送還されて謹慎処分を受けたが、翌年の薩英戦争の際に謹慎を解かれ、英国船に斬り込もうと試みている。この戦争を通して列強の圧倒的実力を思い知った薩摩藩は、留学生を現地に送り込むこととなり、元治二（一八六五）年二月の第一次薩摩藩海外留学生[4]に続いて、慶応二（一八六六）年三月に第二次留学生を派遣することとなった。吉原は横浜でアメリカ人宣教師であるサミュエル・R・ブラウン（Samuel Robbins Brown）牧師から英語を学び、さらに開成所の武田斐三郎から英学を学んだ上で、この第二次留学生の一員として選抜された[5]。

かくして第二次薩摩藩海外留学生に任じられた吉原は、江夏喜蔵、仁礼景礼、湯地定基、種子島敬輔とともに慶応二（一八六六）年三月二十六日、長崎を出航した。ロンドンを経由してニューヨークに到着したのが九月二十七日、ボストンを経て、ボストンから西約百キロの地にあったモンソンへ行き、後発した木藤市介と合流、同地にあったモンソン・アカデミーの校長のチャールズ・ハモンド（Charles Hammond）と面会して、十一月一日に入学した。あくまで鎖国体制下の密航であったため、江夏は久松、仁礼は島田、湯地は工藤、種子島は吉田、木藤は芦原、そして吉原は「大原令之助」という変名を用いている。吉原は長崎出身者として当初は英語科に、翌年には古典科に移り、明治二（一八六九）年まで在籍している。モンソン・アカデミーは、一八〇四年、米国マサチューセッツ州モンソンにジョン・ウィラード（John Willard）牧師によって設立された私立ハイスクールで、吉原が入学した当時は名門進学校として黄金期を迎えていたといわれている。小林功芳は、同校の卒業生であるブラウンが娘婿であった長崎領事館二等補佐官のジョン・F・ラウダー（John Frederic Lowder）などを通じて、薩摩藩に同校への入学を勧誘したのではないか、と推測している[6]。ブラウンが吉原の師であったことは、

先述の通りであり、ブラウンはハモンドのことを高く評価していたため[7]、特にハモンドを信頼して送り出したという面もあったようである。

吉原の英語力は順調に上達していったようである。留学生のなかでも比較的語学力にすぐれていたため、彼を教師として、誰かの家に寄り集まり、文法の輪読などを行っていたという[8]。吉原は一八六九年七月一日にモンソンを卒業しているが[9]、塩崎智によると、六月の卒業式で、吉原は種子島とともに英文スピーチを朗読しており、そのタイトルは「Japan as it was and is」であった。明治維新前後の日本について取り上げたものだったようであり、地元紙の『ハートフォード・デイリー・クーラント』（Hartford Daily Courant）は、彼らはすばらしい英語を話し、かなり鋭敏な観察力と思考力（observation and power of thought）をみせたと報じており、やはり地元紙の『スプリング・フィールド・レパブリカン』（Springfield Republican）も、吉原の英語力について、種子島よりも自由に英語を使いこなしており、二人とも、注意深く聞けば十分理解できる英語を話していたと評している。吉原の英語力は相当に上達していたとみてよかろう。なお、同年一月にニューヨーク州で、吉原はブラウンから洗礼を受けてクリスチャンとなっている[10]。

吉原がクリスチャンとなった背景には、新島襄との交友があった。すでに上海寄港の際にキリスト教に関する本を入手して関心をもちはじめていた吉原は、モンソン到着直後からブラウンから情報を得て、当時アマースト大学などで学んでいた新島のもとを何度も訪れ、キリスト教について語り合い、ともに聖書を読み、祈禱方法を教わるなど、大きな感化を受け、受洗に至っていった[11]。

## 三、イエール大学時代

一八四六年から七一年までイエール大学の学長を務めたセオドア・D・ウールジィ（Theodore Dwight Woolsey）の記録が「Woolsey Family Papers」として同大学図書館のマニュスクリプツ・アンド・アーカイブスに所蔵されているが、そこに、一八六九年九月十三日付で先述のモンソン・アカデミーのチャールズ・ハモンド校長（イエール大学出身）[12]からウールジィに宛てて提出された吉原（大原）のイエール入学に際しての推薦状が含まれている。そこには、「この手紙を差し上げるのは、大原令之助のためです。彼はネイティブの日本人であり、約三年間、モンソン・アカデミーで学んできました。日本政府が我が国に派遣した六人の若い男性のうちの一人であり、我が国の語学を学んでいましたが、大学では特に西洋諸国の法律や政治組織について教育を受けたいということになりました」と記されている。ハモンドは、大原はモンソンに入学した時点で、すでに英語を話すこと、またどんな英語の本でも読むことができ、英語を書くことも得意であったとしており、中国語の文章を英語に翻訳するなど、語学力に卓越していると評価している。その上で、もし大学に入学することができたら、大原は自分を感動させ、大原が学習することで、「日本におけるナビゲーター」となって、翻訳などに取り組んで日本の学校にも貢献することになるだろうと記している。本人の希望として、一年間のみ学部課程で学習し、その後ロースクールに進学する志望を持っていることも記されている。[13]

なぜ、吉原がイエール大学を希望したのかは定かでないが、モンソン・アカデミーのあるマサチューセッツ州モンソンは、ハーバード大学のあるマサチューセッツ州ケンブリッジとイエール大学のあるコネチカット州ニューヘイブンのちょうど中間地点にあり、この地域にはその他にも大学が多数存在していることがよく知られている。その意味で選択肢は多かったわけだが、吉原を高く評価していたハモンドが母校への進学を勧め、その推薦を受けて受験したと考えるのが自然であろう。ブラウンもイエールの出身であり、彼もこれを後押ししたと思われる。

イエール大学図書館マニュスクリプツ・アンド・アーカイブス所蔵の『*Yale University Catalogues 1868-75*』にはロースクール・一八七二年卒業予定学年における一八七〇―一八七一学年の一年生として「Ohara Reynokne, Kagosima, Japan, 121 High st.」の記載があり、それ以外には大学に登録された記録がない[14]。吉原の属していたコースは卒業までに二年を要し、一八七〇―一八七一学年の授業開始日は一八七〇年九月二十一日であった[15]。なお、すでにみたとおり、吉原は当初からロースクールへの進学を希望していた。

では、推薦状を受けた六九年九月からロースクール入学の七〇年九月までの間、吉原は何をしていたのであろうか。同アーカイブス所蔵の『*The Statistics of the Class of 1870, Yale College*』は、「最終年に、若い日本人、大原令之助が一般的な英語学習に従事するため、ここに滞在していた。彼は暗唱や講義に参加し、クラスの正式なメンバーにはならなかったものの、彼は多方面に関心があり、クラスのメンバーもみな、彼を喜びとともに思い出すことになるであろう[16]」と記している。すなわち吉原は、一八七〇年卒業予定のイエール大学学部課程の最終年、すなわち一八六九年―一八七〇年にかけて、非正規学生として学部課程のクラスに参加し、英語の学習や多方面への関心を向けていたわけである。モンソン・アカデミーからの推薦状では「西洋諸国の法律や政治組織について教育を受けたい」と記されており、ここにいう「多方面に関心があり」というのは、具体的にはこれらを指していたのであろう。実際、アメリカン・ボードから派遣された宣教師で、一八七〇年にイエール大学の学部課程を終えて同大学大学院に進学し、一八七三年に哲学博士号を取得後、同志社で教鞭をとったドワイト・W・ラーネッド（Dwight Whitney Learned）は、その回想録において、「明治三年に本国の大学に居って、ウールセー先生から政治学の講義を聞いて居りましたが、その同級生に小原といふ日本人が居りました。之れが私が逢った最初の日本人であります[17]」と記している。明治三年すなわち一八七〇年は、ラーネッドがイエールの学部課程を卒業した年であり、その後ラーネッドは、ギリシャ語の教師を目指してギリシャ語研究に専念して同大学

から一八七三年に博士号を取得し、セイヤー大学のギリシャ語の教師となった。[18] 大学院ではギリシャ語に専念しており、政治学を学んでいたとしたら、学部課程時代であったことになろう。すなわち、ラーネッドは学部課程の政治学の授業で、「小原」という日本人と同席していたわけである。吉原は「大原」としてこの時期学部課程に非正規生として在籍しており、前掲の「エール大学日本学生名簿」によれば、この時期にイエールにいた日本人は吉原ただ一人であった。[19] すなわち、吉原の曾孫である吉原重和が指摘している通り、「この小原こそまぎれもなく大原令之助のこと」[20]であり、彼が政治学を学んでいたことが確認できる。[21]「吉原重俊関係資料」中にある「吉原重俊略伝」には、留学中に「政治、経済ノ学ヲ修ム」とあり、[22] 日銀開業時の『東京日日新聞』も「米国ニ航シ学業ニ従事シ就中当時ヨリ財務ノ事ニ着目シ経済ノ学ヲ講究セリ」と伝えていることから、[23] 経済学を学んでいたこともうかがえる。こうして学部課程で一年間学ぶことも、当初からの吉原の希望であった。

以上を総合すると、吉原は一八六九年九月にモンソン・アカデミーの推薦を受けて、まずイエール大学の学部課程で非正規学生として学びはじめ、その一年後の一八七〇年九月、イエール・ロースクールに入学したものの、第一学年満了時まで在籍はせず途中で退学し、卒業はしなかったことになる。「エール大学日本学生名簿」の筆頭にも、吉原（大原）の所属先は「Law School」で、一八七〇―七一学年に一年生として在籍していたとあり、[24] 右の資料と一致する。前述したような卓越した英語力が、吉原をして、名門イエール大学に日本人としてはじめて入学するという栄誉を達成せしめたのであろう。

吉原がいつ退学したかだが、イエール大学の学生が編集していた『*The Yale Literary Magazine*』の一八七〇年十一月号に、「大原令之助（鹿児島、日本）は、戦争の報告書を作成するため、日本政府によってヨーロッパに派遣された」との記述がある。[25] 同年七月、普仏戦争がはじまっていた。この記事を最初に発見した吉原重和によれば、旧知の大山弥助（巌）が普仏戦争の観戦武官団を率いて到着するため、これに随行して戦争の報告書を作

成することとなり、十一月二十五日付で大学を去ったという。[26] その後、吉原は欧州に渡り、普仏戦争を視察した大山の通訳を務めたようで、『読売新聞』は「普仏戦地巡視の為め今の大山陸軍大臣が欧州へ渡航せられしにつき吉原氏は其通弁となり……戦地を巡視」と伝えている。[27] パリ到着後すぐにパリはドイツ軍によって包囲され、翌年一月に陥落したが、吉原はこれに巻き込まれたようで、「吉原重俊略伝」には、「一八七〇年（明治三年）普仏戦争ノ際ハ巴里ニアリテ籠城ノ苦ヲ嘗メタルコトアリ」とある。[28] パリ陥落後、吉原は大山と共にロンドンに渡ったが、一八七一年三月十日、吉原は大山と別れてフランクフルトに移ることとなり、大山から、惜別の漢詩を贈られている。『元帥公爵大山巌』によれば、吉原とは「倫敦到著以来、枕席を同うしたるもの、離情殊に深きものがあつた」という。[29] これ以降、吉原はロンドンとフランクフルトを往復する生活を送っていたようで、普仏戦争終結（一八七一年五月）後も、九月には吉原が英国から「大原令之助」名で政府に対して帰国の申請を出しており、政府は「当局御入用」という理由で認めなかった記録が残っている。[30] 何らかの重要な任務に就いていたのであろう。この九月の十九日には大山が「独逸国国内フランクホート」の吉原に宛てて書簡を送っており、この月のうちにはフランクフルトに移っていたことがわかる。[31] 吉原は当時フランクフルトで、紙幣印刷に関する仕事に従事していたようである。[32]

このため、吉原がイエール・ロースクールに在籍していたのは、わずか約二カ月、ということになる。イエールでの修学経験としては、非正規生としての学部時代の方が長く、吉原にとっても貴重な経験になったと考えられる。吉原はイエール入学前の一八六九年五月には官費留学生となっていたため、[33] 政府の命令を受け入れざるを得ない立場にあった。犬塚のいうように「好成績で卒業」することはできなかったが、大学のキャンパスからすぐに戦地へと赴くというキャリアの転換によって、一年あまりにおよぶイエールでの英語・法律・政治・経済に関する学習は、すぐに実践の舞台を与えられることとなった。その意味で、彼のキャリアにおいてイエール留学

は決して小さなものではなかったと思われる。

## 四、外交官・大蔵官僚として

観戦武官団での活動後、欧州にいた吉原はワシントンDCに到着した岩倉使節団に召喚され、一八七二年二月九日（明治五年一月一日）に、「本官ヲ以テ外務取調通訳申付候事」と特命全権使節（岩倉使節団）から辞令を受け、同日に、「三等書記官トシテ随行申付候事」と、やはり特命全権使節から辞令を受けている。さらに同年七月十九日には、三等書記官を免ぜられ、「随行之心得ヲ以テ外政事務取調之為使節帰朝迄英国に滞在申付候事」と特命全権大副使から辞令を受けた。いずれも、「大原令之助」として辞令を受けている。(34)

以後、吉原は一貫して外交事務調査をもって任務としており、帰国後の明治九（一八七六）年三月に右大臣岩倉具視に提出した「外交関係事務調査報告書」によれば、「重俊閣下ニ随フテ西洋ニ在ルヤ外交関係ノ事務ヲ調査ス可キノ命ヲ奉セリ」として、条約改正の際の参考のためとして「他国人民ヲ接遇スル所ノ法規」を整理・報告している。ここで吉原は、西洋各国では、外国人でもあっても「両国信好ノ友義」によって「相当ノ保護」を加えるのが「公理」であり、同時に犯罪を犯せば自国民と同じく罪を問われるとして、外国人の動産不動産への課税についても自国民同等に扱われるとしている。ただ、西洋各国では外国人に「政治ニ関係スルノ権」を与えることはなく、また自国にとって「掛念」される外国人には国外退去を命ずる権利も、各国は保有しているという。実際、英国では外国人にも自国民とほぼ同一の権利を付与しており、動産不動産の所有についても対等だが、外国人に参政権は与えられておらず、フランスでも外国人に参政権はないが、製造業・商業の経営については自国民と同等である。ただ、外国人は正式な在留資格を得ても、あくまで「戸籍」は外国人のままであり、それが

参政権を与えられない最大の理由であるとしている。このほか、国籍の離脱や婚姻についても、詳細に記述している。[35]

冒頭で述べている通り、吉原は条約改正交渉上の参考としてこれを書いており、不平等条約を改正して対等条約とし、外国人にも一定の権利を付与することになった際の前例として欧州の例を引いている。事例とされている英国、フランスについては、当時の最新の法改正まで把握して記述されており、吉原の長期にわたる留学や観戦武官団での経験が生かされた格好であった。「吉原重俊略伝」も「慶應二年外遊以来既ニ七カ年ヲ経過シ只管苦学力行以テ海外情勢ノ推移ニ着目シ彼我社会情勢ニ通暁セルコトヲ得タリ」として、七年におよぶ苦学によって海外情勢に通暁したことや、普仏戦争での経験によって、「大使一行ノ外遊ニ付テハ大ニ活躍シ少ナカラス便宜トナレリ」と評している。[36]

ちなみに、政府においては、明治四（一八七一）年七月まで、「大原令之助」が吉原重俊であるとは把握していなかったようで、明治四年十二月九日に文部省が太政官史官に提出した報告書によると、同年七月に、文部大輔だった江藤新平が宮中で、「大原」が自らを「鹿児島県士吉原弥二郎」と称している名簿をみつけ、調査したところ、「吉原弥二郎事英国ニテ大原令之助ト改称シ居候」ことが確認され、江藤にもその旨報告されたという。[37] ただ、大原令之助名を用いてはならないとは指示されていないため、吉原はこの名前を使い続けていたわけである。

岩倉使節団での勤務を終えた吉原は、明治六（一八七三）年四月に外務省五等出仕となったあと、同月中に考報局副長を命ぜられ、十月二十五日には外務一等書記官として米国公使館勤務を命じられた。先述の通り、政府はすでに大原すなわち吉原であることを把握していたが、吉原は使節団からの帰国を機に「重俊」と改名したらしく、これも政府は把握済みで、これらの辞令は「吉原重俊」に対して出されており、これ以降、公文書上の氏

名はすべて吉原重俊となっている。政府としても、この改名を機会に吉原重俊と統一したのであろう。この後、おそらく米国勤務に出発する前の十一月十八日、大蔵省五等出仕となって大蔵省に所属が変更となり、翌年一月に租税助、七月には横浜税関長に就任した。その翌月には、台湾出兵の収拾のため全権弁理大臣として北京に派遣された大久保利通に随行し、十一月に帰朝、翌月に租税権頭となる。八年一月には横浜税関長を免ぜられて、五月には地租改正局四等出仕、九年二月に大蔵大丞、十年一月に租税局長兼関税局長となり、翌月に発生した西南戦争においては熊本県下の被災者救助に派遣された。十二年十二月に議案局長に転じたあと、翌年二月に横浜正金銀行管理長を命ぜられ、三月には大蔵少輔に就任した。十五年六月に日本銀行創立委員となり、後述の通り、同年十月に開業した日本銀行の初代総裁となる。[38]

この間の経歴で注目すべきは、大久保との関係である。右の通り、吉原は北京談判に向かう大久保に随行し、「吉原重俊略伝」によれば、「事件解決ニ少ナカラス尽力」し、[39]実際、その功績によって、「白羽二重　二匹」「縮緬代金百七拾円」を下賜されている。[40]同郷の大久保とは、いつからかは不明だが、交際は深かったようで、「吉原重俊関係資料」には、いずれも年不詳ながら、吉原の帰国後、会合の約束をしたり、フランスでの取り調べ事項についての指示を受けたり、翻訳についての打ち合わせをしたり、といった三通の吉原宛書簡が残っている。[41]この時期、吉原は外務官僚あるいは大蔵官僚であり、大久保は一貫して内務卿であったため、直接の上司ではなく、いわば非公式に指示を受け、面会していたことになる。大久保が北京談判の際に吉原を随行したのも、こうした交際を通じて個人的な信頼関係が構築されていたためと思われる。

明治六（一八七三）年の政変後、政体取調を担当することになった伊藤博文に対し、大久保は「明治六年大久保参議起草政体ニ関スル意見書」を提出しているが、その際も大久保は、吉原と吉田清成（薩摩藩第一次海外留学生、当時大蔵少輔）に起草を依頼し、三者の相談の上、意見書が作成されたことが、すでにあきらかとなって

いる。[42]

伊藤が政体取調を担当することになるのは十一月十九日で、政変で板垣退助等征韓派参議が辞表を提出したのは十月二十四日だが、同日には大久保が吉田に宛てて、「昨夜御願申上候取調物則り御取掛下、今晩迄に凡御出来被下候由、誠に大幸之至り御座候」と、二十四日夜には取調書ができそうだと聞いて喜んでいる旨が記されている。[43] 実際にはやや時間がかかったらしく、同月二十七日には大久保が吉田宛書簡で、「御取調書出来之由」として、これを受け取って読みたいと述べ、さらに「国体論之処云々拝承仕候是は可成早目是方仕合御座候間大略を一通り順序を取御取調被下綿密ニいたし余は又跡々に御回し被下ましくや」と依頼しており、[44] 十一月二日には吉原に対しても、前日吉田との話し合いに出席してくれたことに礼を述べるとともに、「猶御咄申上度候付今晩七字頃参上可致候」と、自ら打ち合わせのため吉原のもとを訪れる旨を記した書簡を送っている。[45] この十一月一日の会合が取調書に関するものであったことは、十一月二日付の大久保・吉田宛書簡に、「昨日は定て御取調可有之筈御苦労至極奉存候」とあることからわかる。[46] 吉田の取調書また国体論がいつ大久保に届けられたかは定かでないが、おそくとも十一月五日までには「政体書」としてまとめられたものを大久保が読んでおり、同月五日、大久保は吉田に、「確定之政体論ハ詳密相調」べてあり、別段異存はないとした上で、明日「大原」をつれて吉田のもとを訪れるため待っていて欲しいと述べ、「大原」からも取調書が「一通出来」そうであるため、これを清書するよう依頼している。[47] かくして、吉田と吉原の草案と、両者との打ち合わせをもとに大久保の意見書が作成され、同月中に伊藤に提出された。[48]

大久保の意見書は、「政体」は外国の制度をそのまま導入するのではなく、あくまで「我国ノ土地風俗人情時勢ニ随テ」構成されるべきであるとして、「民主」制度を取り入れることは、長く封建制度に親しんできた日本の人民には「適用スベカラズ」として、「定律国法ハ即ハチ君民共治ノ制ニシテ上ニ君権ヲ定メ下モ民権ヲ限リ

至公至正君民得テ私スベカラズ」、と「君民共治」の必要性を説いた。その具体的な枠組みを定めるものとして、「確固不抜ノ国憲ヲ制定」することを主張したが、天皇は国政執行において「無上ノ特権」を有し、政治的責任は負わず、勅任官や全権公使の人事、議院への議案の下付、賞罰、爵位、陸海軍の指揮などの権限をもつとされ、その天皇を太政大臣が「輔弼」して「万機ヲ統理」するほか、華族、選挙で選ばれた議員、行政長官をメンバーとする「議院」あるいは「議政院」を設け、「国憲」に基づいて予算、課税、立法、貨幣鋳造・発行、国債発行、軍の増減など、一定の議事を審議するものの、その施行には関与せず、議決もあくまで太政大臣への奏聞を通して親裁を仰ぐべきものとされた。(49)

どの程度まで吉原の意見が反映されているかは定かでないが、意見書作成過程への深い関与からみて、吉原の政治構想の一端を示しているとみてよかろう。それは、長期の留学や視察、外交官、大蔵官僚などとして見聞を広めてきた吉原の、ひとつの到達点であった。

## 五、日銀総裁として

日銀の広報誌『にちぎんクオータリー』は、「日銀総裁列伝」と題するシリーズで、明治十五（一八八二）年十月開業とともに初代総裁に就任した吉原について、次のようにまとめている。

総裁としては、当時政府と全国各地の「国立銀行」が発行していた不換紙幣の回収整理を進め、日本銀行が発行する兌換銀行券を現金通貨の中心とすることに尽力したほか、手形、小切手の流通を促進するなど、近代的な金融制度の整備に努めました。しかしながら、病魔に冒された彼は明治二〇年一二月、総裁の現職のまま死去しました。四三歳という

若すぎる死でした。[50]

ここにあるように、不換紙幣の回収整理事業、日本銀行券の定着、そして手形、小切手の流通などが、彼の在任約五年間の、主な業績であった。

明治十五（一八八二）年五月一日に日銀開業式が開かれ、松方正義大蔵卿が演説したが、これに答える形で吉原は、そもそも「財政」とは、「国運隆替に係る所民命休戚の由る処」であるとして、日銀は「財政の要衝に当りて一大機関となり全国の貨財を流通し一国の財政を維持するの大任」を担うこととなったと述べ、通常の銀行とは異なる以上、「当銀行に従事する者鞠躬尽力豈に報効せる処あらざる可けんや」と、職員に呼びかけた。[51]「全国の貨財を流通」にかける、吉原の自負と意気込みがうかがえよう。

不換紙幣は、主に政府紙幣と国立銀行紙幣に分かれており、前者の回収は松方正義大蔵卿のもと、すでに回収の見通しがたっていたが、後者についてはまだ目処がたっていなかった。このため、日銀創立の翌年五月、国立銀行条例を改正し、国立銀行の紙幣発行特権を開業から二十年と限定した上で、日銀は紙幣引換準備金をもとに公債を買い入れ、その利子を中心として国立銀行紙幣償却の元資とする政策と日本銀行券の発行を開始し、紙幣償却の影響で業績が悪化していた国立銀行もこれに協力する姿勢をみせて、現金通貨は日本銀行券に収斂されていくこととなった。明治十七（一八八四）年十二月に吉原は、かつて普仏戦争の観戦武官団の仕事などで滞在したロンドンに渡って、中央銀行業務の視察を行っている。[52]

吉原は日銀の国内体制を構築することにも努め、明治十九（一八八六）年七月、松方に対して、地方情勢を詳しく観察し、日銀と他銀行と連携して地域の金融・経済環境の変化に対応すべく、当時大阪にしか展開していなかった支店機能を拡大することを申請して、許可されている。以後十年間に、岐阜、和歌山、西部、札幌、函館、

根室、京都、と支店・出張所を拡大し、その後も支店・出張所、事務所は増え続け、統廃合や改称を繰り返しながら、現在の三十二支店十四事務所体制が整っていった。[53]

日銀総裁時代、吉原は病気がちで日常業務の多くは副総裁の富田鉄之助に委ねられていたようだが、[54]それでも、先述、また後述のごとく海外への視察も行っており、その無理な活動を支えていたのは、博学多才ぶりであった。ロンドンでの視察の際に卓越した英語力が活かされたことは想像に難くないが、仕事を共にした部下たちは、多くの場面でその博学ぶりに驚かされている。

昭和六（一九三一）年四月十一日付『時事新報』夕刊は「半世紀の財界を顧る」と題するシリーズのなかで、「総裁吉原の人物」との見出しで吉原について次のように評している。

> 吉原は所謂秀才型の男で、幼にして神童の誉郷党に高く、元治元年五代友厚、寺嶋宗則が監督となつて薩藩最初の海外留学生として森有礼、吉田清成等を率ゐて渡欧したときには其選に入っている。明治四年帰朝四月十九日外務書記生十月二十五日外務書記官となり米国在勤、七年の台湾征討事件には大久保に随行して清国に行つている。明治十年一月十一日大蔵省の租税局長となり十三年二月横浜正金銀行の設立せらるゝや其監理官となり十三年三月大蔵少輔に昇任した、其後日本銀行創立事務員として創立事務に当り十月十日初代の日本銀行総裁に任ぜられた次第である。[55]博学多識の学究的な温厚な男で、日本銀行の創立に際して外国の制度の調査は最も多く吉原の力に依ったらしい

吉原が「博学多識の学究的な温厚な男」であったことは、吉原のもとで日銀副総裁となってその病身を支え、後を継いで第二代日銀総裁に就任する富田鉄之助も、吉原は温和で人と争うことを好まず、学才と経済への熟知において官僚中その右に出る者はなかったといい、自分の地位にもこだわらず、藩閥意識も低かったが、多病で

決断力には乏しかったと証言している。[56] 日銀総裁就任後に欧州へ視察旅行をした際、同行した大蔵官僚の浜田市助（帰国後に日本銀行に入行し、検査局長）も、「常に重俊の博学強聞なるを知り」、吉原の知識を試そうとロンドンで難解な英単語について質問したところ、吉原はその単語がラテン語からどのように変遷して今日にいたっているかを蕩々と語り、「市助呆然として語なし、重俊の博学に服」したという。[57] すでに述べた通り、学生時代から吉原の語学力には定評があり、それが発揮された格好であった。

吉原は明治十八（一八八五）年三月から、欧州での無記名公債証書の販売調査・交渉のため、欧州への視察旅行を行った。[58] 明治十八年三月十六日、吉原は大蔵省に「日本銀行願書」を提出し、公債証書の販売について吉原自らが「外国ヘ渡航シ彼我市場ニ於テ実地発売方」調査したい、と申し出たところ、翌日、大蔵卿松方正義は、日銀が現下の財政状況に鑑みて「外国人ニテ金札引替無記名公債証書所望ノ向」があるかどうかを調査するため、「総裁自カラ彼我ヘ渡航」したいと申し出ており、大蔵省としてもこれは必要であるとして太政大臣三条実美に許可を求めた。これは「伺之通」と許可されたが、渡航に際して、松方は取引先銀行の設定や外国人顧問の採用などを吉原に委任しており、事実上は調査というよりも交渉が目的だったようである。[59] こうして三月から八月にかけて英国、フランス、ドイツで調査・交渉が行われたが、八月十八日付で松方は、吉原の調査の結果、「公債証書者純然タル内国債ニシテ其体裁モ普通一般ノ証書ト相異ナリ旁彼地市場ノ気合ニ適セス到底発売方六カ布」として、公債証書の外国での販売の見込みがたたないことが判明したため、三条に吉原の帰国を申請し、許可された。[60]

欧州での調査は普仏戦争以来十分経験済みであり、その結果、吉原は自らの見通しの甘さを実感することとなったが、その博学ぶりは、こうした視察旅行でも発揮されていたわけである。

では、「日本銀行の創立に際して外国の制度の調査は最も多く吉原の力に依ったらしい」というのは事実であ

ろうか。

吉原が欧州で観戦武官団に随行していた明治四（一八七一）年一月二日、大蔵大輔・大隈重信と大蔵少輔・井上馨は、正貨兌換の銀行券を発行する「バンクオフジャパン」を設立する構想を示していたが、すぐに日本銀行設立とはならず、各種の建白書提出などを受けて、西南戦争後のインフレ下で紙幣価値が下落し、十四（一八八一）年九月には内務卿・松方正義も中央銀行設立を唱える意見書を提出、これを踏まえて、翌月に大蔵卿に就任した松方は十五年三月に日本銀行創立についての意見書を提出するに至った。その草案および日本銀行条例草案を作成したのは、銀行局長の加藤済だといわれているが、条例草案の討議には加藤、吉原、郷純造、富田鉄之助、が参加し、「幾十回」の会合をもったという。この意見書が採用され、元老院の審議などを経て日本銀行条例が十五（一八八二）年六月二十七日に布告された。翌日、大蔵省内に日本銀行創立事務取扱所が設けられ、創立委員として大蔵少輔の吉原、大蔵大書記官の富田、大蔵権大書記官兼銀行局長の加藤の三名が創立委員に任じられる。こうした経緯を考慮すると、右の『時事新報』のような評価は吉原にとっては過分といえよう。日銀創立に際して深く関与したのは事実であるが、あくまで加藤を中心に集められた草案作成メンバーのひとりにすぎなかった。その意味で、加藤が初代総裁となるべきとも考えられるが、松方は創立委員発令前の段階で吉原総裁、富田副総裁という内意を示しており、加藤は外れていた。加藤も鹿児島出身でフランスやベルギーでの調査経験もあったが、富田によれば、それまでの出世があまりに早く、今回も総裁に就任させると世間の信用が得られないと考えられたこと、吉原と加藤の両方を総裁・副総裁に任用すると、薩摩閥の印象が強すぎ、これも世間の目を気にしたこと、がその背景にあったという。ただ、当然加藤は不服で、仕事も怠慢になっていった[61]。吉原と加藤とは常に仲が悪く、加藤は当時すでに病身であった吉原に辞退を迫り、療養に努めるよう勧めたこともある、と富田は記している[62]。

加藤が総裁になれず、かつ、吉原と加藤のうち一名しか総裁または副総裁になれなかったとすれば、富田総裁、加藤副総裁あるいは吉原副総裁、といった選択肢もあったはずである。そこで吉原が選ばれたのは、それまでの豊富な在外経験から国際経済に明るく、当時の経済界では珍しい新知識のひとりであったため、当時藩閥内でも吉原以外に該当者がおらず、世間の評判もよかったためだといわれている。松方はあくまで薩摩閥の影響力を日銀に及ぼしたいと考えており、その意味でも仙台出身の富田が総裁になるという選択肢はあり得なかった。創立委員三名中もっとも大蔵省での職位が高かったというのも、総裁就任の要因のひとつであろう。(63) いずれにせよ、吉原はキャリアの最後まで、その豊富な海外経験に支えられることとなったのである。

## 六、むすび

もともと少年時代から秀才の誉れ高かった吉原重俊は、横浜などでの修学を経て第二次薩摩藩海外留学生に選ばれ、モンソン・アカデミーでは在学中から英語の才能を発揮し、同校の校長の推薦を受けて、イエール大学学部課程の非正規生として一年、イエール・ロースクールの正規生として二カ月間、英語、政治学、経済学、法律学を学んだ。実に日本人として初の、イエール大学入学であった。イエール卒業は普仏戦争の勃発という外在的要因によって果たせなかったものの、イエールのキャンパスからそのまま同戦争の観戦武官団に参加し、武官団の通訳を務め、パリ籠城を経験し、そのレポートを作成する任務にあたったことで、吉原は、それまで学んできた机上の学問を、実地の経験を通して深めるという、通常得がたい経験を蓄積することとなった。

右のような経歴と経験は当時の日本政府においても貴重なものであり、吉原は帰国さえ許されず、在欧中のまま米国に召喚されて外交官となり、岩倉使節団に参加、外交事務調査にあたった。それまでの長期にわたる留学

や観戦武官団での経験を総動員して調査にあたった吉原は、条約改正後の日本を見据えて、欧州での外国人の権利について考察することになる。

その後吉原は、公的には外交官、そして大蔵官僚として歩みながら、私的には大久保利通の腹心として、その国家構想を練る一端を担った。吉原が大久保に提出した取調書は管見の限り現存しないが、それまで蓄積してきた見聞を踏まえて、吉原が開陳したはじめての国家構想であったに違いない。日銀総裁としては、病苦に苦しめられながらも、中央銀行調査や外国債発行などのため、自ら欧州に足を運ぶことをやめなかった。それは、それまでの経験から、実地での見聞や交渉の重要性を認識していたとともに、自分こそがその任にあたるべきであるという、経験と実績を踏まえた強烈な自負に支えられていた、といってよかろう。そもそも、加藤から辞退を求められ、病気を患いながらも、あえて総裁の職に就いた背景にも、こうした自負が存していたものと思われる。吉原にとって、国境はどこまでも低く、欧米は、距離としても感覚としても、かなり近い存在としてとらえられていたに違いない。

もとより、こうしたキャリアをスタートさせたのは薩摩藩であり、大久保の腹心となったのも、最終的に初代日銀総裁という座に就いたのもまた、薩摩閥であったがゆえである。吉原は藩閥の論理と人脈のなかで、しかし国境を頻繁に乗り越えることで、独自のキャリアを切り開いた希有な官僚であった。その墓は現在、大久保利通や松方正義と同じ、東京の青山霊園にある。

（1）「エール大学日本学生名簿」（Manuscripts and Archives, Yale University Library）。

（2）犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』（吉川弘文館、一九八七年）、一三三―一九二頁。ただし、イエールを「好成績で卒業」したことについての典拠は示されていない。

（3） イエール大学の日本人留学生については、拙著『評伝 岡部長職―明治を生きた最後の藩主』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六年）において、一八七九年に同大学に入学した岡部の学生時代や、同大学の日本国内同窓会組織について検討したことがある。こうした個人研究の中でイエール留学時代について言及しているものとしては、ほかに大橋昭夫『斎藤隆夫―立憲政治家の誕生と軌跡』（明石書店、二〇〇四年）、星亮一『山川健次郎伝―明治を生きた会津人・白虎隊士から帝大総長へ』（ちくま文庫、二〇〇七年）などがあるが、あとはイエール留学生の回顧録がみられる程度で、イエール日本人留学生の研究そのものは、朝河貫一研究を例外として、あまり進捗していない。吉原についても、曾孫である吉原重和が最近発表した「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」（『新島研究』第一〇四号、二〇一三年二月）のほかは、学術的な研究はほとんど存在しない。

（4） これについては、犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』（中公新書、一九七四年）など、参照。

（5） 前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、大久保喬樹『洋行の時代―岩倉使節団から横光利一まで』（中公新書、二〇〇八年）、一六頁、三宅晴輝『日本銀行』（文藝春秋新社、一九五三年）、一一二―一一六頁。薩摩藩第二次留学生派遣の経緯については、前掲『明治維新対外関係史研究』、一三三―一四六頁、に詳しい。なお、元治二年二月から慶応二年一月まで、勝海舟の「氷解塾」でも学んでいた（高橋秀悦「「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀総裁」富田鉄之助―戊辰箱館戦争後まで」『東北学院大学経済学論集』第一八二号、二〇一四年三月、一〇〇頁）。

（6） 小林功芳『英学と宣教の諸相』（有隣堂、二〇〇〇年）、三八―五三頁、前掲『明治維新対外関係史研究』、一四一―一五八頁。吉原の最初の留学予定先はフランスであったが、これが米国に変更された理由として犬塚孝明は、本文のようなアメリカ人宣教師による勧誘のほか、英仏より米国の方が当時、学術レベルが低く、留学生のレベルから適当と思われたこと、また、当時は英仏より米国の方が、学費が低かったこと、を挙げている（前掲『明治維新対外関係史研究』、一三八―一四一頁）。ブラウンはマカオや香港でモリソン記念学校の校長を務め、一時帰国したのちに、日本にやってきているが、この一八四七年の一時帰国の際にも、三名の同校の生徒をモンソンに連れて帰り、モンソン・アカデミーに入学させ、うち一名はイエール大学に進学している（前掲『英学と宣教の諸相』、四九―五三頁、Edward J.M. Rhoads, *Stepping Forth into the World: The Chinese Educational Mission to the United States, 1872-81* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2011), pp.3-8）。

（7）一八六六年八月二七日付のジョン・M・フェリス宛書簡でブラウンは、薩摩藩からの留学生について、「この港から出帆した人は、モンソン・アカデミーのすぐれた校長、チャールス・ハモンド師の世話になって、英語の勉強をするため、モンソンに行くことになっています」と記し、同年一二月三一日付の同人宛書簡でも、ハモンドを「名校長」と称している（高谷道男編訳『S・R・ブラウン書簡集』日本キリスト教団出版部、一九六五年、二〇〇―二一二頁）。

（8）前掲『明治維新対外関係史研究』、一六〇頁。

（9）前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、九頁。

（10）塩崎智「幕末維新期、米国日本人留学生による英文発信例の考察―中等学校（モンソン・アカデミー）卒業式で朗読された英文スピーチを資料として」（『拓殖大学語学研究』第一二七号、二〇一二年一二月）、一―三四頁、William Elliot Griffis, *A Maker of the New Orient Samuel Robbins Brown: Pioneer Educator in China, America, and Japan: the Story of his Life and Work* (New York: Fleming H. Revell, 1902), p.215.

（11）詳しくは、前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、参照。吉原と新島との交流、および吉原のキリスト教信仰については、本井康博『新島襄を語る（八）―ビーコンヒルの小径』（思文閣出版、二〇一一年）、二三八―二三九頁、本井康博『新島襄を語る（九）―マイナーなればこそ』（思文閣出版、二〇一二年）、二〇三―二〇八頁、塩崎智『アメリカ「知日派」の起源』（平凡社選書、二〇〇一年）、九三―一一三頁、も参照。

（12）ハモンドについては、前掲『英学と宣教の諸相』、四〇頁、参照。

（13）Woolsey Family Papers (MS 562), box 21, folder 393, Manuscripts and Archives, Yale University Library.

（14）Yale University, *Yale University Catalogues 1868-75* (New Haven: Yale University), Students 23. Manuscripts and Archives, Yale University Library.

（15）Yale University, *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, 1870-1871* (New Haven: Yale University), p.53, Manuscripts and Archives, Yale University Library.

（16）Yale College. Class of 1870, *The Statistics of the Class of 1870, Yale College* (New Haven: Class Officers Bureau), p.16, Manuscripts and Archives, Yale University Library.これらの資料の調査・閲覧については、同アーカイブス

のジュディス・アン・スチフ氏およびクラリン・スピーズ氏のご協力・ご教示を仰いだ。記して感謝申し上げたい。

(17) D・W・ラーネッド著・河野仁昭編『回想録』（同志社、一九八三年）、五頁。

(18) 竹中正夫「D・W・ラーネッド」（『同志社時報』第七六号、一九八四年三月）、一〇三―一〇四頁、大越哲仁「ラーネッドとセイヤー・カレッジ」（『新島研究』第九九号、二〇〇八年二月）、五七―五八頁。

(19) 前掲「エール大学日本学生名簿」。

(20) 前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、二二頁。本井康博も同様の見解を示している（前掲『新島襄を語る（八）―ビーコンヒルの小径』、二五一―二五三頁）。

(21) ちなみに回想録中にある「ウールセー先生」とは、当時学長を務めていたウールジィのことだと思われる。前掲「D・W・ラーネッド」（一〇六頁）は、このウールジィから政治学の講義を受けていた、としている。ウールジィはギリシャ語の教授だったが、政治学にも通じており、一八七七年には、Theodore Dwight Woolsey, *Political Science or, The State Theoretically and Practically Considered* (New York: Scribner, Armstrong & Company, 1877)、という著書も刊行している。

(22) 「吉原重俊略伝」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）。

(23) 『東京日日新聞』一八八二年十月十日付朝刊。

(24) 前掲「エール大学日本学生名簿」。

(25) *Yale Literary Magazine*, Vol. 36, No.2 (November 1870), p.106.

(26) 前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、参照、二二―二三頁。なお、同論文は吉原がイエールを去ったのは「一八七一年一一月」としているが、本文の通り、吉原が欧州に渡ることを伝えている記事が掲載された雑誌が刊行されたのは一八七〇年十一月であり、これは「一八七〇年一一月」とするのが正しいと思われる。実際、大山がニューヨークに到着したのが一八七〇年十月二十八日で、十一月二日にはニューヨークからイギリスに向けて出航しているため、これに同行していたはずであり、本文の十一月二十五日は、あくまで記録上の退学の日付であって、実際には十一月二日にはアメリカを離れていたと思われる（大山元帥伝編纂委員編『元帥公爵大山巌』大山巌伝刊行所、一九三五年、三三〇頁）。

(27) 『読売新聞』一八八七年十二月二十一日付朝刊。
(28) 前掲「吉原重俊略伝」。
(29) 前掲『元帥公爵大山巌』、三四〇頁。
(30) 「公文録」明治四年・第一三九巻・辛未・文部省伺坤（国立公文書館蔵）。
(31) 「大山弥助書簡」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）。大山は一八七一年五月に日本に帰国しており（前掲『元帥公爵大山巌』、三四二頁）、この書簡では御親兵設置の経緯などについて吉原に報じている。
(32) 前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、二三頁。
(33) 前掲「新島襄と吉原重俊（大原令之助）の交流」、九頁。
(34) 「吉原重俊外務取調通訳辞令」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）、「吉原重俊三等書記官随行辞令」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）、「吉原重俊英国滞在辞令」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）。
(35) 「ＪＡＣＡＲ（アジア歴史資料センター）Ref.A04017155600、単行書・大使書類原本肥田為良・吉原重俊・川路寛堂・杉山一成報告理事功程・全（国立公文書館）」。
(36) 前掲「吉原重俊略伝」。
(37) 「公文録」明治四年・第一三九巻・辛未・文部省伺坤（国立公文書館蔵）。この当時は氏名の漢字を厳密に規定して用いる文化は一般に定着していないため、吉原も自らを「弥次郎」ではなく、「弥二郎」と称したのであろう。
(38) 「吉原重俊内閣履歴」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）、「吉原重俊考法局副長辞令」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）、前掲「吉原重俊略伝」。この間、明治十三年一月に創立された交詢社に加入し、常議員も務めているが、明治十五年四月には退会している（『交詢社百年史』交詢社、一九八三年、五二、六二、一八〇―一八一、六六〇頁）。
(39) 前掲「吉原重俊略伝」。
(40) 前掲「吉原重俊内閣履歴」。
(41) 「大久保利通書簡」（「吉原重俊関係資料」鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵）。

(42) 『大久保利通文書』第五巻（日本史籍協会、一九二七年）、一三一―一三七頁、笠原英彦『大久保利通』（吉川弘文館、二〇〇五年）、一五九頁、笠原英彦「大久保政権の成立をめぐる一考察」（『法学研究』第七十四巻六号、二〇〇一年六月）、九五頁、藤田正「大久保利通の「国民国家」―「立憲政体に関する意見書」を素材として」（明治維新史学会編『明治維新の政治と権力』吉川弘文館、一九九二年、所収）、一一〇―一一一頁。

(43) 京都大学文学部国史研究室編『吉田清成関係文書』一・書簡編1（思文閣出版、一九九三年）、一八六―一八七頁。

(44) 前掲『大久保利通文書』、一二一―一二二頁。

(45) 前掲『大久保利通文書』、一三一頁。

(46) 前掲『吉田清成関係文書』一・書簡編1、一八七―一八八頁。

(47) 前掲『大久保利通文書』、一三六―一三八頁。大久保の日記をみても、十月二十二日に「大原」のもとを訪ねて一通の封書を托して以降、十月二十四日、十月二十九日、十一月九日、伊藤博文と寺島宗則が政体取調に任じられた十一月十九日、十一月二十二日、十一月二十三日、十二月二日、と「大原」が頻繁に大久保のもとを訪れている。本文にもある通り、十一月六日には、大久保が「大原」を連れて吉田清成を訪問した（『大久保利通日記』下巻、日本史籍協会、一九二七年、二〇六―二一八頁）。この「大原」は吉原の可能性が高い、と藤田正は推測しているが、筆者もこれに賛同するものである（前掲「大久保利通の「国民国家」」、一二四―一二五頁）。この書簡にある「大原」も当然、吉原のことであろう。

(48) 前掲『大久保利通文書』、一八二―二一一頁。大久保意見書の作成過程、背景、内容、評価については、前掲『大久保利通』、一五六―一六七頁、前掲「大久保利通の「国民国家」」、一〇二―一二六頁、前掲「大久保政権の成立をめぐる一考察」、九四―一〇三頁、など参照。

(49) 「明治六年大久保参議起草政体ニ関スル意見書」（「伊藤博文関係文書」国立国会図書館憲政資料室蔵、書簡の部、五〇三）。

(50) 「日銀総裁列伝　第二回　吉原重俊」（『にちぎんクオータリー』第四六号、一九九七年夏季号）。

(51) 『読売新聞』一八八三年五月二日付朝刊。

(52) 前掲『日本銀行』、一一二―一一六頁、実業之世界社編輯局編『財界物故傑物伝』下巻（実業之世界社、一九三六年）、六一九頁。

(53) Kris James Mitchener and Mari Ohnuki, "Institutions, Competition, and Capital Market Integration in Japan", *The Journal of Economic History*, Vol. 69 No.1 (March 2009), pp.153-157.

(54) 吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁 富田鉄之助伝』（東洋経済新報社、一九七四年）、七〇―九四頁。

(55) 『時事新報』一九三一年四月十一日付夕刊「半世紀の財界を顧る（三三）」。引用文には、森や吉田とともに「薩摩藩最初の海外留学生」の選に入った、とあるが、正しくは第二次の留学生として選抜されたことは、すでにみたとおりである（なお、最初の留学生派遣は元治元年ではなく慶応元年）。このほか経歴にも不正確な記述が多いが、正しくは本文の通りである。

(56) 前掲『忘れられた元日銀総裁 富田鉄之助伝』、六九頁。

(57) 実業之日本社編『実業家奇聞録』（実業之日本社、一九〇〇年）、二〇七―二〇八頁。

(58) この欧州視察旅行は、表向きは欧州銀行の調査とされていたようだが、さらなる目的は公債証書の売却にあることは、報道でも伝えられていた。『東京経済雑誌』（第一五九号、一八八五年四月四日、四二四―四二六頁）の記事「吉原重俊君欧州に赴く」は、「今回の行は欧州諸銀行の実況を視察するにありと雖も重なる目的は公債証書売却の件ならん」と伝えている。

(59) 「ＪＡＣＡＲ（アジア歴史資料センター）Ref.A03022917800、公文別録・大蔵省・明治一五年～明治一八年・第五巻・明治一八年一月～明治一八年七月（国立公文書館）」。

(60) 「ＪＡＣＡＲ（アジア歴史資料センター）Ref.A03022919700、公文別録・大蔵省・明治一五年～明治一八年・第六巻・明治一八年七月～明治一八年一二月（国立公文書館）」。

(61) 日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史』（日本銀行、一九八二年）、一八―二一八頁。

(62) 前掲『忘れられた元日銀総裁 富田鉄之助伝』、六七―六九頁。

(63) 吉野俊彦『歴代日本銀行総裁論』（毎日新聞社、一九七六年）、一六頁、前掲『忘れられた元日銀総裁 富田鉄之助伝』、六九頁。明治十五年六月時点での大蔵省内の職位は、上から、大蔵卿が松方正義、大蔵大輔は空席で大蔵少

輔が吉原重俊であり、吉原は大蔵省ナンバー2の地位にあった。続く大書記官は富田鉄之助を含めて十名おり、加藤と同じ権大書記官も八名いた（彦根正三編『改正官員録』博公書院、一八八二年）。同じ権大書記官はともかく、加藤が十名の大書記官と大蔵少輔を飛ばして総裁の座に就くのは、富田のいうように、それまでの出世が早かっただけに、世間の目がはばかられたのであろう。

**追記**　本稿は、二〇一四年二月十三日にイエール大学歴史学部で行った特別講義「Asakawa Kanichi as a "Caretaker" of Yale Japanese Students」の内容をもとに、作成したものである。執筆にあたり、寺尾美保氏（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）、内山一幸氏（福岡大学非常勤講師）、町田剛士氏（鹿児島県歴史資料センター黎明館）、ジュディス・アン・スチフ氏（イエール大学図書館マニュスクリプツ・アンド・アーカイブス）、クラリン・スピーズ氏（イエール大学図書館マニュスクリプツ・アンド・アーカイブス）、ダニエル・ボツマン氏（イエール大学歴史学部教授）に、大変お世話になった。記して感謝申し上げる次第である。